

派遣者番号	R5K08	氏名	安部 佳奈子
研究主題 —副主題—	通常の学級におけるインクルーシブ教育 —教師の学級経営観と教室環境との関係に着目して—		
派遣先大学	東京学芸大学 教職大学院	指導担当者	村山 拓
所属	杉並区立杉並第七小学校	所属長	畝尾 宏明

キーワード：学級経営、教室環境、インクルーシブ教育、特別支援教育

要旨： 学校の教室は、児童生徒が一日の大半を過ごす場である。特に小学校では、体育や音楽、図工といった専科の授業以外は、ほとんどの時間を自分が所属する学級で生活することが多い。学校には、ほぼ同じ構造の教室が並んでいるが、教室の中は、児童や教師の机の配置、ロッカーの置き場所、掲示物、備品等が学級によって異なり、同じ環境の教室は存在しない。

教室環境は、教師の学級経営観や在籍している児童の実態によって、作り出されると考える。このことを検証するために、都内の公立の小学校の通常の学級の担任を対象に、学級経営観と教室環境についてのアンケート調査とインタビュー調査を実施した。回答結果と考察から、学級経営を行う上で教室環境を調整することは、重要なことであり、学級経営に大きな影響を与えることが確認された。教室環境を調整することで、学級経営に必要とされる他の項目も向上することを考察した。

このことを受け、文部科学省が提示する「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進（報告）」（2012）の中で、「誰もが相互に人格と個性を尊重し支え合い、人々の多様な在り方を相互に認め合える全員参加型の社会」の構築に向けて、必要なことは、「教室環境の調整」、「教師の働き方改革」、「チーム学校の体制づくり」を学校の実態に応じて整えていくことが重要であると考えた。

通常の学級におけるインクルーシブ教育

—教師の学級経営観と教室環境との関係に着目して—

安部 佳奈子

1. 研究の目的

学校には、ほぼ同じ構造の教室が並んでいるが、教室の中は、児童や教師の机の配置、ロッカーの置き場所、掲示物、備品等が学級によって異なり、同じ環境の教室は存在しない。教室環境は、教師の学級経営観や在籍している児童の実態によって作り出される。

そこで本研究では、小学校の通常の学級担任の学級経営観や児童の実態によって、どのような教室環境になるのか、アンケートやインタビュー調査を行い、教師の学級経営観と教室環境との関係を検証した。

2. 研究の方法

東京都内の同一自治体に設置されている公立小学校のうち、令和5年度の学校経営計画に、「インクルーシブ」、「特別支援教育」等のキーワードを掲げている学校7校（教員数144名）を抽出した。学校長を通して、現在通常の学級の担任を行っている教師に、調査への回答を依頼した。

3. 結果

調査依頼した7校の教師144名中、102名から回答が得られ、回答率は70%であった。

学級経営で大切にしていることは、「児童の受容、容認」が75%と7割を超える教師が選択していることから、学級経営を行う上で、児童を褒める、気持ちを受け止める、を重視している（図1）。学級経営の満足度は、6割の教師が自身の学級経営について、「やや満足」、「満足」と答えていた（図2）。年代を見ると、30代以降の教師が「やや満足」、「満足」を選択する傾向があった。教室内の整理整頓は、ほとんどの教師が選択した（図3）。教室には、学習用具や生活で必要となる物が多く置かれている。9割以上の教師は、それらの整理整頓を心掛けていることが明らかになった。「座席の配慮」については、配慮が必要な児童を前方にしたり、関係が良好な児童同士で座らせたりと、教室環境を設定する上で、重要視されている項目であることが確認された。

教室環境に満足している人は、学級経営に満足している傾向があった（図4）。学級経営を行う上で教室環境を調整することは、とても重要なことであり、学級経営に大きな影響を与えることが確認された。

掲示物の量に関しては、「やや少ない」、「少ない」を合わせると、全体の2/3を占めており、少ない傾向にあった。しかし、高橋（2022）によると発達段階による掲示の量に違いが見られることから、一概に掲示物の量が少なくなっているとは考えにくい。掲示物に対する考えは、2つに意見が分かれた。高橋・佐藤（2021）のように、掲示物が児童に刺激を与えるという考えと、花熊（2018）のように、活動の手順や段取りを分かりやすく示すことにより、児童の思考を手助けするという考えである。

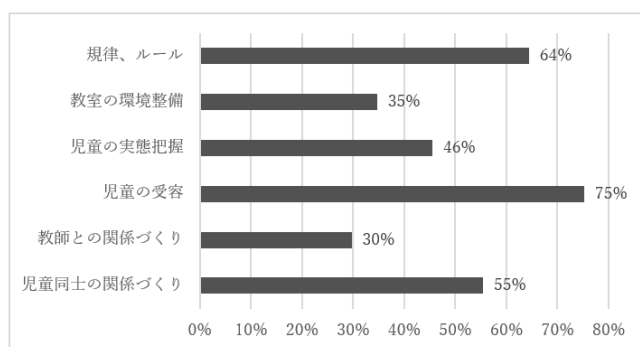


図1 学級経営で大切にしていること（3つ選択）（N=102）

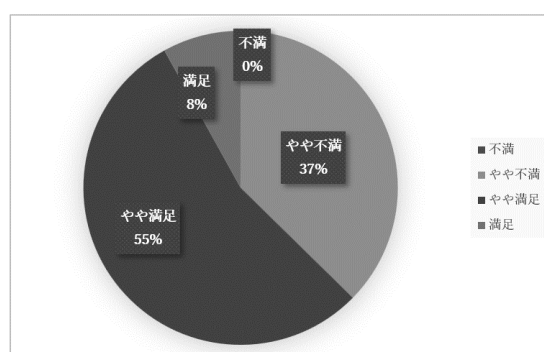


図2 学級経営の満足度（N=102,単位:%）

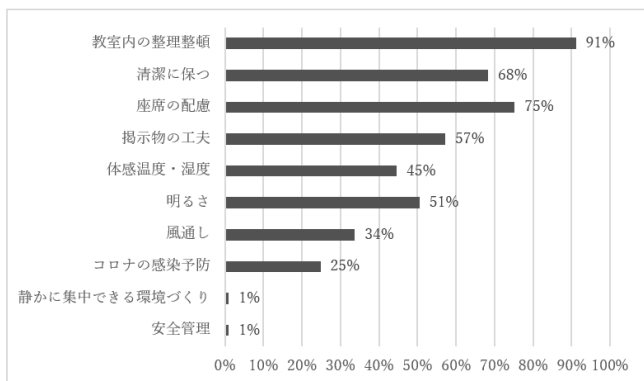


図3 室環境で心がけていること（複数回答可）(N=102) ←

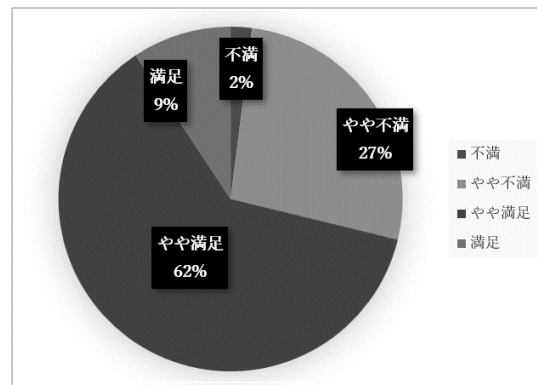


図4 教室環境の満足度(N=98,単位:%) ←

学級経営と教室環境の各項目でクロス集計及びカイ二乗検定を行い、5%水準（以上）で有意差が見られたのは、以下の6つであり、教師の学級経営観と教室環境との関係が明らかとなった。

- ①「学級経営の満足度」と「教室環境の満足度」
- ②「経験年数」と「学級経営の満足度」
- ③「体感温度・湿度」と「学級経営の満足度」
- ④「児童同士の関係づくり」と「掲示物の量」
- ⑤「児童の受容、容認」と「教室を清潔に保つ」
- ⑥「大切なこと等を児童の目に入るところに貼る」と「掲示物を前面には貼らない」

①～③から、学級経営が満足と感じる要因として、「教室環境の満足度」、「経験年数」、「体感温度・湿度」が示された。教室環境は、教育活動が行われる場所であり、物理的および社会的な側面がある。物理的な側面は、机の配置や掲示物、明るさや体感温度・湿度である。社会的な側面は、教師と児童との関係、児童同士の関係、学習へのサポート、評価とフィードバックである。物理的な教室環境の方が、可視化されている場合が多く、他の学級や書籍を参考にして、比較的取り組みやすい。まずは、③の「体感温度・湿度」を意識することから始めてみるのはどうだろうか。体感を意識したり、室温計を見たりして、快適に過ごすことを心掛ける。そうすることで、気持ちが落ち着き、落ち着いた状態で学級経営に取り組むことができる。

②は、経験年数が上がる程、学級経営の満足度も高かった。インタビュー調査でも、「昔は、くじ引きで席替えをしていたが、今は違う」という回答があり、教職経験を重ねる中で教師の教室環境に対する思いは変化していることが確認された。小さな調整を重ねることで、児童が安心して過ごせる空間を作り上げることができると考えられる。小さな調整によって、児童の行動は少しずつ変化していく。行動が変わることで、気持ちも変化し、学級経営にも変化が見られると考えられる。

④の「児童同士の関係づくり」、⑤の「児童の受容、容認」、⑥の「大切なこと等を児童の目に入るところに貼る」は、児童の実態や特性を理解した上で、実践するものである。教室環境を調整することは、児童の実態や特性を理解することと関連することを示唆している。児童の実態や特性を把握して、座席の配置を考慮したり、掲示物を貼る場所を考えたりして、教室環境を調整する。児童の実態や特性を把握することは、学級経営を行う基盤となるのである。このことから、教室環境から児童の実態がつかめるのではないかと考える。掲示物がやや多い、少ない、前面に貼る、貼らない等、教師の考えだけでなく、児童の実態を受けて、調整される可能性が考えられる。一方で、学級経営に悩んでいる教師がいた場合、教室環境を一要因としてアドバイスをすることが可能となる。物理的な教室環境と社会的な教室環境の両側面から、学級経営を見つめ直すきっかけを作ることができると考える。

4. 参考文献（サブタイトルは省略）

- 花熊暁（2018）ユニバーサルデザインの学級・授業づくりの意義と課題，社会問題研究第67巻
- 高橋大悟・佐藤慎二（2021）ユニバーサルデザインに基づく教室環境と授業の改善の有用性に関する検討，植草学園短期大学紀要第22号，pp 1-12
- 高橋陸斗（2022）小学校の教室掲示物の掲示実態と学年差，日本教育工学会論文誌46，pp. 73-76